

フィンランド 湖水めぐり

(フィンツアー日食観測グループ)

大越 治

☆ 観測地の選定

7月20日16時55分、予定より遅れて小雨のヘルシンキ空港を飛び立ったDC9は、40分程の飛行で、目的地ヨエンスーの空港に着陸した。小さなヨエンスー空港には、独自で先に現地入りしていた、大学の後輩の池田君が待っていてくれ、観測地の下見のようすなどを聞くことができた。荷物をバスに運ぶ間にも、ときどき小雨がパラつく。

2年も前から予約してあったキンメルホテルに着くと、玄関前のボールには、日本をはじめスウェーデン・カナダ・ソ連などの国旗が掲げられ、それ以上の様々な国の人々でごったがえしていた。とりあえず荷物を部屋に入れ、まずはホテル内での下見を行う。

キンメルホテルは、皆既中心線のわずか0.6kmほど南東にある。ここで観測できれば便利このうえない。全員でまず、最上階のレセプションルームへ。残念ながら、このホテルには屋上がない。だからレセプションルームのバルコニーが、最も高い場所になるのだ。しかし全員登るには狭すぎるし、他の宿泊客も当然来るだろう。それに、皆既の太陽がある北東には工場があり、邪魔にはならないが前景として美しくない。ホテル南東端の会議室と、そのバルコニーも見せてもらったが、同じようなものだった。全員協議の結果、ホテルでの観測はやめて、他に観測地を捜すことになる。

19時集合、バスで観測地サーベイに出かける。前日、ヘルシンキで鋭気を養ってきているとはいえ、白夜でいつまでも明るいというのは、慣れないうちは思いのほか疲れるものだ。しかも、まだ夕食もとっていない。空は曇りである。

小学校の先生で、日食のためにボランティアをしているというレーナ・スオメラさんの案内で、ヨエンスーの北側に向かって出発。レーナさんの着ている日食Tシャツや、持っている日食バック。一息ついたらあれを町で買おう、という声がそこかしこで聞こえる。

最初に立ち寄ったのは、ヨエンスーの北7.8kmほどの道路脇の小高い丘である。レーナさんは、あまりおすすめではない、ということだったが、とりあえず登ってみる。見晴らしがよいが、太陽の方角近くに木立があり、邪魔になるかどうかは微妙なところである。また、高压送電線の近くなので、右ネジの法則にしたがって方位磁針が効かないということも不安だ。

次は、ここはおすすめ、という所である。ヨエンスーの北東18kmほど、ピューティヴァーラ丘の北東斜面である。皆既の太陽は真正面になり、左右各70度ほどは遮るものがない。立木が伐採されたばかりで足場は余りよくないが、広場の一番奥を北西から南東に走る（太陽に向かう線に対してほぼ直角）小道なら、三脚もしっかり立てられる。ただし太陽高度が低いので、大勢の人が来て前に出られたらおしまいだ。小道に一列に並んで観測できれば、ここは最高の

観測地である。

この土地の所有者の方の家は、真新しいログハウスである。お願いして、全員で見学させていただいた。奥さんと娘さんの設計で、友人に手伝ってもらって2年間で作ったそうだ。当然、立派なサウナがついた、我々日本人から見ると夢のような家である。

三番目は、中心線をはさんでピューティヴァーラとほぼ対象の位置の、モンニの近くにある牧場だ。フィンランドならではの湖水の渡しを渡り、バスが到着するころ、再び小雨が降り始めた。ここも広々していて、ピューティヴァーラよりも牧歌的な美しさがある所だったが、北東の低い所に電線があり、これが前景としての難点である。

私としては、ヨエンスーの南西側を重点的に下見したかったのだが、もうみんなかなり疲れているようだし、その方面は池田君が下見をしてくれるというので、もうホテルに戻ることにした。バスの中の話合いで、ピューティヴァーラを第一候補地にすることを決め、22時前にホテルに到着した。

夕食をとり、部屋に戻って機材の準備をする。池田君から電話があり、下見の様子を聞く。私が日本に居るときから目星をつけていたカスケスニエミの岬の突端は、まさに中心線上で見晴らしも最高であるが、すでにイギリスのプロが設営していて、当日は200人以上が詰めかけるだろうということだった。池田君たちはそこを避け、ホイティアイネン湖の南端、ハイカンニエミの近くで観測する予定だという。明朝のリハーサルの準備を終え、ベッドに入ったのは23時30分をまわった頃だった。

☆ リハーサル

7月21日、午前1時45分起床。2時間と少し眠れた。さすがに眠い。機材を持って2時10分頃、ロビーに出る。リハーサル参加者は、我々夫婦と山下・石橋・森・星野夫妻・間辺、旅行社から椿・橋本の各氏、合計10名である。本番に備えてゆっくり休みたい人、ホテルから太陽を見て露出だけチェックしたい人は、ホテルに残ることにした。

かなり薄暗い道を走り、25分程で到着。機材を置く場所を選び、組立に約1時間をかけた。空のほとんどは雲に覆われているが、北東の地平線近くだけは雲がない。気温は約11℃。蚊がたくさん寄ってくるので、用意の蚊取り線香をつけて防ぐ。3時50分頃には小雨がパラついたが、北東の地平線は相変わらず晴れている。空気が澄んでいるので、登ってきたばかりの太陽がとてもまぶしい。高度2度、3度が結構高く感じる。

突然日本語が聞こえ、東南の林の中からK社のグループの方たちが現れた。観測地捜しの途中だという。場合によってはここで一緒に、という話も出たが、こちらはすでに機材の位置を決めてリハーサルを始めているので、前の方に展開されては困るという事を申し出る。

5時過ぎに機材を撤収。ダイポリンテープで観測予定地を囲い、ここを使用する旨を書いてホテルに引き上げた。シャワー・朝食を済ませ、8時過ぎから14時頃まで眠った。

昼頃から、外ではお祭騒ぎが始まっている。午後から町に出て、マーケットやインフォメー

ションをまわる。日食グッズもかなりたくさん出回っている。お祭り広場を離れると、それでもリュックを背負って近隣国から観測にきた若者や、カメラ片手の観光客が多いが、落ち着いて美しい、どこを取っても絵になる風景があふれている。

夕食をとり、機材の調整をして、21時頃ベッドに入った。

☆ 夜より暗い皆既日食

7月22日、0時起床。窓から見ると地面が濡れている。機材を持ち、ロビーでメンバーがそろろうのを待つ。他の国の人々も、ざわざわと準備を始めている。ロビーの椅子に座っていた、スウェーデンから来た青年と話すと、良い地図がないのでホテルから観測するつもりだという。

1時にバスに乗るが、ホテル前が混んでいてなかなか出られない。1時34分に観測地に着いてみると、昨日とは違って変わり、ログハウス前にはバスや車が一杯だ。大急ぎで機材を持って広場に行くと、我々のテーブルなど跡形もなく、昨日リハーサルをした場所の半分くらいがきれいに整地され、その中に十数台の望遠鏡が整然と並んでいるではないか。フランス隊だという。昨日私が作っておいた望遠鏡設置の目印は、何の役にも立たなくなっていた。

こうなっては今さら騒いでもしょうがない。フランス隊の横に並ぶ形で我々も設営である。全天曇り。北東の地平線だけは雲が薄いようだ。時々雨がパラつく中、セッティングを進める。昨日より暖かだ。嫌な予感がする。気温は15°C。

そのうち、大きな機材を持ったフィンランドのTV局が乗り込んで来た。そして、我々の前の広場にレールを敷き始めた。あわてて走って行って聞くと、このレールの上をカメラを走らせながら中継するという。それでは我々の観測ができないからと、レールの長さを約半分に縮めさせた。上空の雲は相変わらず厚く、北東の地平の雲は切れている。

2時半頃、私がバスのトイレを使いに行っている間に、一騒動起きた。TV局が撮影のためには大きなライトをつけると言い出したのだ。これに猛然と抗議したのがフランス隊である。そちらがライトをつけるというなら、こちらはコンセントを抜くぞ、という言い合いから、あわや棒をつかんでの殴り合に発展しそうになった。石橋氏が必死で棒を押え、我々の添乗員氏たちが仲裁に入っている頃、私は現場に戻った。やっと、ライトは観測が終わってから、ということに決着した時、フランス隊から大きな歓声が上がったのである。

しばらくして北東の地平線が明るくなり、右上が欠けた太陽が顔を出すと、今度は一斉に歓声上がる。雲の隙間は南から北へと流れて行く。カメラをすべてセットして待つ。連続食分写真を3コマ写し、いよいよ第2接触10分前、記録テープのスイッチを入れた直後、欠けた太陽は雲に捉えられた。南側にもう隙間はない。

辺りは急速に暗くなる。バスに飛び乗って北へ走ったら？という考えが頭をよぎる。しかし、

アフリカのサバンナならいざ知らず、湖だらけのフィンランドで思う方向に走れるわけがない。万事休す。

第2接触。シャドーバンドは出ない。雲がまだらなので、本影錐も思ったほど見えない。ただ、太陽のある方向をはさんで、左（北）が赤く、右（南）が赤くはないが明るく、その間が黒い。その黒がゆっくりと右から左に動いて行く。思ったより暗くならない。しかし真夜中よりは暗い。後ろのギャラリーでは、盛んにストロボが光る。「No Flash!」の声上がるが、一向に止まない。地上の騒ぎをよそに、月の影は着実に北東に向かって地上を滑って行く。

90秒はあっという間に過ぎた。暗くなったときと同じように、急激に明るさが戻って来る。コロナが見られなかったにもかかわらず、あたりからは一斉に拍手がわき起こった。

青みを取り戻した空を見上げると、わずかな雲の隙間に何やら白い筋が見える。飛行機雲だ。そういえば、この上空を10機を越す飛行機が観測のために飛んでいるはずだった。上空ではどんな光景が見えたのだろう。

部分食の後半は、雲のために全く見るができない。こうなると後かたづけの早いこと！日本人はみんな早々にバスに引き上げ、私たち夫婦はあっという間に観測地に取り残されてしまった。隣でのろのろ片付けている、フランス人やフィンランドのTV局に、急に親しみを感じてしまう。

ホテルに戻ったのは6時過ぎ。シャワーを浴びて食事に出かけると、ホテル1階のホールや廊下に、いろいろな国の人が荷物を枕にゴロゴロ寝ているではないか。なんだか残念を絵に書いたような光景である。

☆ フィンランド観光団宣言

10時。バスで次の宿泊地クオーピオに向かう頃になると、本格的に雨が降り出した。この時から、我々日食観測団はフィンランド観光団になった。普通、日本人がフィンランドに行く場合、ヘルシンキとラップランドを1泊くらいずつしかしない。今回我々は、フィンランドで最も美しい南部湖沼地帯を、バスでゆっくり巡るのである。1国1地方をじっくり回るといって、最高にぜいたくな旅が我々を待っているのだ。